

農林水産大臣賞受賞

“イーハッチャー”進取の精神で取り組むむらづくり
～農業に生き残りをかけた農業用水の確保～

いえそんあざにしえうえく
受賞者 伊江村字西江上区

くにがみぐんいえそん
(沖縄県国頭郡伊江村)

■ 地域の沿革と概要

西江上区が位置する伊江村は、沖縄本島の本部半島から北西9kmの洋上に位置する落花生の形をした島で、人口4,567名（令和元年5月31日現在）の1島1村である。周囲は22.4km（東西8.4km・南北3km）で、北海岸には断崖絶壁が連なり、山岳・河川が無く南北に緩傾斜をなす全体的に平坦な島である。

気候は亜熱帯性で、年平均気温は23℃、降雨量は2,000mm程度であり、年間を通じて植物等の育成には好条件であるが、雨水の多くは地下に浸透し、珊瑚石灰岩層中の傾斜面をつたって南海岸に流れ出る。

島の北西部には在日米軍の伊江島補助飛行場があり、基地は島全体の35%の面積を占めている。

島内唯一の山である城山（ぐすくやま）は「伊江島タッチュー」と呼ばれ島内外の人々から親しまれており、標高は172.2mで、沖縄本島からも望むことが出来る。伊江島は、本島からフェリーで30分程度に位置し、「日帰り可能な離島」として人気が高く、戦争に関する史跡等もあることから県内外からの遠足・修学旅行の需要も高い。近年では、修学旅行生等を対象とした農林水産業体験型の民泊も盛んに行われている。

また、国の重要無形民俗文化財である伊江島の村踊をはじめ島独特の民俗芸能が数多く保存されており、芸能文化の島として注目されている。

産業は第一次産業が主体で、村の総生産額の46%を占めており、農家戸数688戸、農業総生産額約43億円、漁業者80戸、漁業総生産額約2.6億円となっている。

第1図 位置図



農業は、公共事業により整備されたため池や地下ダムを水源として、さとうきび・花き・葉たばこ・野菜(とうがん、かぼちゃ、島らっきょう等)の生産や畜産が営まれている。



写真1 伊江村の農産物

島の特産品は、伊江島牛、島で生産された落花生で製造される「黒糖ピーナッツ」、御当地ソーダの「イエソーダ」、島のさとうきびから作られるラム酒「イエラムサンタマリア」、伊江島小麦の全粒粉を使用したチップス「ケックン」、島内限定販売される手作りのあんこもち等である。また、従来は廃棄していたソデイカの足を有効活用したイカ墨ギョウザや、イカ墨じゅーしい(沖縄風炊き込みご飯)等、新商品の開発も積極的に行われている。

伊江島では離島苦、水不足、戦災、米軍基地問題等の苦境に耐え忍んできた歴史があり、根性と忍耐強い島民気性が”イーハッチャー”(負けん気性、進取の気性)という言葉に表現されている。

伊江島では離島苦、水不足、戦災、米軍基地問題等の苦境に耐え忍んできた歴史があり、根性と忍耐強い島民気性が”イーハッチャー”(負けん気性、進取の気性)という言葉に表現されている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

西江上区は、伊江島のほぼ中央に位置し、人口673名(令和元年5月時点)、農家戸数143戸、かんがい農業をいち早く展開した農業が盛んな地区である。きく、野菜、葉たばこ、畜産等が営まれており、農林水産大臣賞等の受賞者を多く輩出している。

文化・芸能においては、伊江村内各地区の輪番制で、8年に一度、村踊りを披露しており、西江上区の村踊りは特に迫力がある。

スポーツ面では、陸上競技・野球などが盛んで、村陸上競技大会では村記録を保持している選手が多数おり、区対抗でも五連覇を達成している。

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	100.0%
	総世帯数 143戸
	総農家数 143戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 80戸
	1種兼業農家 1戸
	2種兼業農家 5戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 366ha
	耕地面積 185ha
	田 0ha
	畑 185ha
	耕地率 50.5%
	農家一戸当たり耕地面積 1.3ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

伊江島は、保水力が非常に乏しい珊瑚石灰岩土壌で、干ばつが起りやすく、昔から水に苦勞してきた歴史がある。また、6月から10月にかけて台風襲来の頻度が高く、農作物の安定生産に大きな影響を与えてきた。

昭和52年1月に本島からの上水道の海底送水が完成したことにより、

長年の飲料水不足が解消し、村民の生活環境が飛躍的に向上した一方で、農業用水は、必要量の2割以下しか供給できない小さな池しかなく、十分な水を確保できない状況にあった。

このような中、昭和50年代の主な農業収入は、さとうきび、畜産と僅かな葉たばこの生産に頼っており、干ばつや台風など天候に左右される農業では生活できないため、島を離れていく者が多かった。

また、島には高校がないため、ほとんどの子供は中学校卒業と共に島を離れる。島に若者が生計を立てられる主要な産業がなく、島で就業できないことから、若者が減り続け、希望のもてない農村になりかけていた。

離島で産業や観光資源に乏しく、生活は農業に頼らざるを得ない実情の中で、島の生き残りをかけた農業の振興、農業所得の向上、将来を見据えたむらづくり・担い手づくりなどが課題となっていた。



写真2 西江上区の二才踊り

イ むらづくりについての合意形成の過程

昭和54年以前は、極めて厳しい農業経営状態で、島の農業生産額は約15億円、農家1戸当たり農業生産額は約160万円と生活が苦しい状況が続いていた。農業しかない島で、農業で生活が成り立たないことから、人口流出に歯止めがきかず、過疎化が進行していくことが予想された。

そこで、西江上区では、区民たちが立ち上がり、農業振興により島を発展させるため、「天候に左右されない農業の実現」を目標に、課題を解決するための話し合いを行い、昭和46年に村役場へため池建設に関する要望書を提出した。

ウ 現在に至るまでの経過

西江上区から提出された要望書等を踏まえ、昭和55年に水確保対策事業等が着手され、12年間で新たに20万 m^3 のため池が村内に建設された（現在のため池総容量は約60万 m^3 ）。また、同時期に発足した西部かん水組合を中心に、島の立地条件に合う収益性の高い作物の導入等、農業所得の倍増と若者に魅力ある農業の実現を目指した取組が進められた。

さらに、平成16年度から平成29年度まで、国営かんがい排水事業により地下ダムやかんがい施設などが整備され、農作業労力の軽減が図られたことで、若手新規就農者や担い手の経営規模拡大が進み、産地形成が進展した。

現在では、豊富な水源により、安定した農業生産ができるようになって

ており、花き・肉用牛・葉たばこ・野菜・さとうきび等の生産が行われている。

特に、収益性の高い作物として輪ぎくが導入されて以降は農業用水の確保と共に花き栽培面積が伸び、現在、大ぎく・スプレイぎく・モンステラについては県内最大の産地となっている。これにより、花き栽培に従事するUターン新規就農者と葉たばこ農家の後継者が増加し、農業に活気が出てきている。



写真3 西江上区の花き栽培

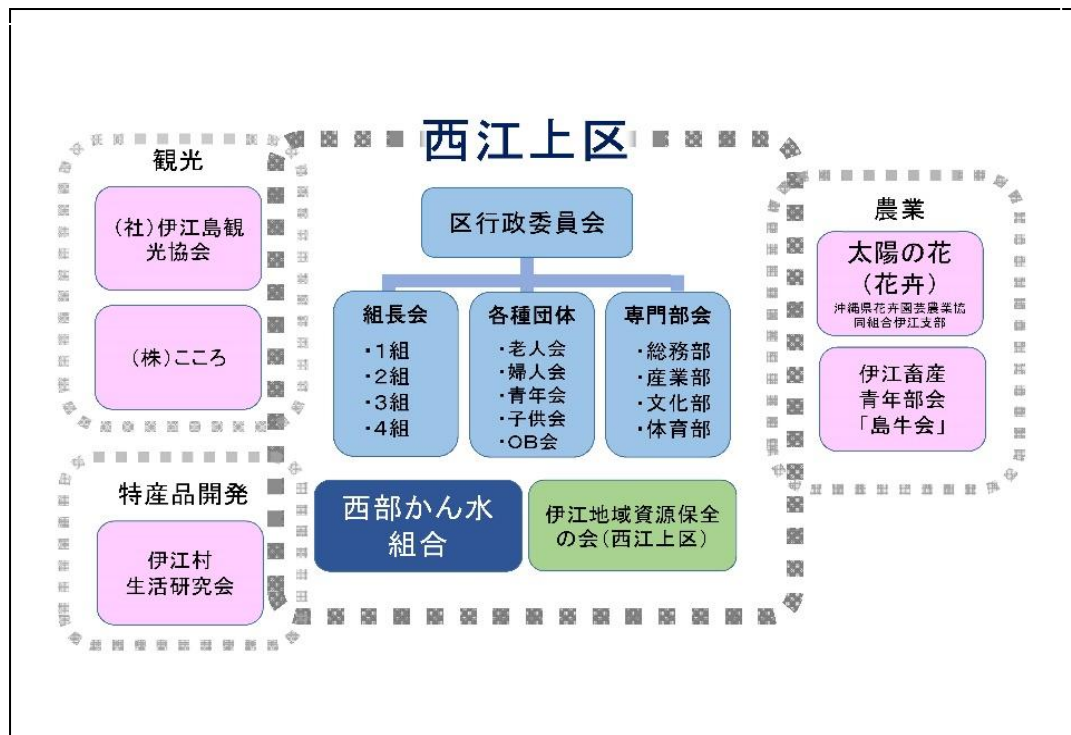
野菜は、とうがん、かぼちゃの生産が盛んで、現在では、島らっきょうの生産増加が顕著である。肉用牛は、品質も向上し、伊江島牛として県内外で高く評価されている。

(2) むらづくりの推進体制

ア 西江上区の組織体制

西江上区では、区行政委員会により区行政が担われており、最高責任者は区長である。区行政委員会は、村会議員、伊江村教育委員、農協役員、農業委員、老人会長、婦人会長、青年会長で構成されている。

第2図 西江上区の推進体制



イ 西江上区を構成する各種団体の概要

① 老人会

65歳以上の男女会員が180名おり、毎月、公民館の清掃活動と区のゲートボール場の管理を行っている。また、集落内の防風林の下草刈り等を行い、集落内の被害防止に不可欠な防風林の維持管理の一役を担っている。

② 婦人会

会員が110名おり、2か月に一回、花壇の管理等を行い、地域の景観保全に貢献している。また、かんがい用水の重要な水源であるため池の汚染を防止するため、環境に優しいエコ石鹸を手作りし、地区の全家庭に提供することで、水質の保全に努めている。

③ 青年会

18歳以上29歳以下の10名の男女会員がおり、2か月に一回、グラウンドの草刈り作業を行っている。また、2年に一度開催される敬老会においては、正式な上演が8年に一度である村踊りを伝統継承の意味を込めて披露している。

④ 子供会

5歳以上15歳以下の67名の会員がおり、毎月、公園の管理作業を自主的に行っている。このことは、集落の維持管理の大切さを学ぶ情操教育の一環を担っている。

⑤ O B 会

青年会のO Bで30歳以上64歳以下の126名の男性会員がおり、年3回、区内の道路管理や伐採作業を行っている。

ウ 西江上区と連携する他の組織、団体の概要

① 西部かん水組合

西江上区が運営・管理する水利組合であり、昭和55年5月に発足し、伊江西部地区の農家130戸からなる組織である。

② 伊江地域資源保全の会

伊江地域資源保全の会は、西江上区の農地水・保全の会が中心となって設立された組織であり、集落内の排水路、道路等の清掃を行い、区内の美化や生活環境の保全等に貢献している。また、2か月に1度実施する区内一斉作業には、区内のほぼ全世帯が参加しており、区民同士の連携に寄与している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

伊江村には、離島苦、水不足問題、戦災、基地問題等の苦境を耐え忍んできた歴史があり、伊江村の“イーハッチャー”（負けん気性、進取の気性）の気質でむらづくりが進められている。島独自、区ごとの村踊り等伝統行

事が多く受け継がれ、子供から高齢者まで地域住民が連携したむらづくりが行われている。

西江上区では、農業用水の確保をはじめとして、農業の発展に取り組んできた先人たちの“イーハッチャー”気質を継承しつつ、高収益農業の推進、地域の所得の向上、担い手や後継者等が確保できる農業の振興・発展を実現させている。また、地域内の各団体が縦横の連携を図りながらむらづくりに取り組んでおり、地域の中心としてその活性化に貢献している。

2. 農業生産面における特徴

(1) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

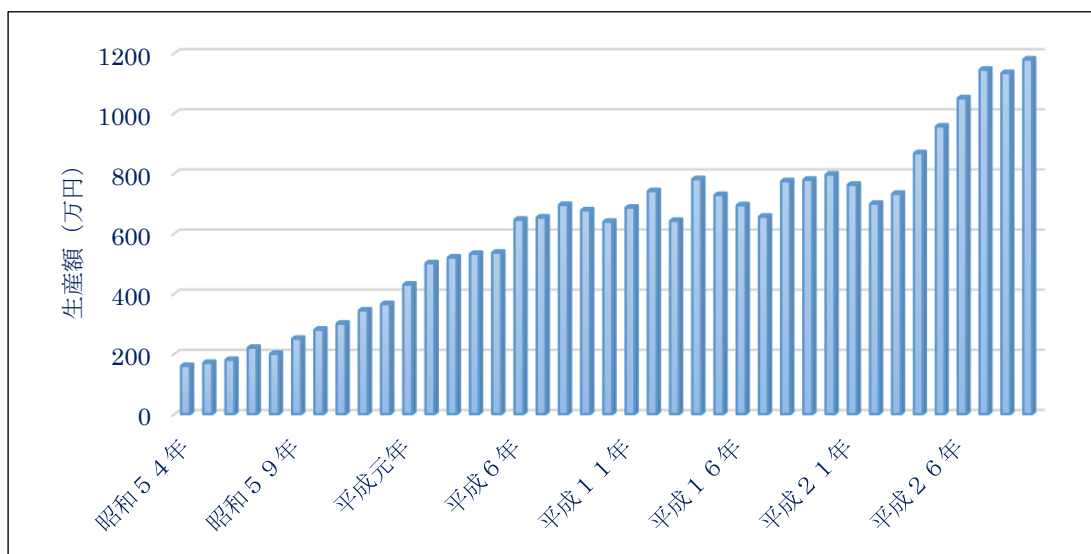
ア 西江上区のむらづくりににおける農業生産への寄与状況

西江上区では、昭和48年に県営かんがい排水事業、昭和52年に県営畑地総合土地改良事業が完了した、西部かん水組合を発足し、伊江村の先駆けとして、かんがい農業を導入したことにより、農家所得が増加した。西江上区が先駆けとなり、村内でかんがい農業への転換の重要性が浸透したこともあり、平成5年度から平成9年度までの県営かんがい排水事業や、平成16年度から平成29年度までの国営かんがい排水事業における地下ダム整備により、島内全域において、かんがい農業が展開されるようになった。

西江上区が運営する西部かん水組合は、今日の伊江村のかんがい農業の優良地区として、現在でも先導的に活動を行っている。

また、平成22年度に立ち上げた西江上区の農地水・保全の会は、地域住民が一体となり、集落内の清掃や農地保全、農業水利施設の管理を行う組織である。表面水を農業利用するため、水路、道路等の清掃を徹底しており、このことは、海洋汚染の一因となっている赤土流出防止の役割を果たすなど、現在でも重要な役割を果たしている。

第3図 伊江村の1戸当たり生産額



かんがい農業に転換後、農業所得が向上したことで島外への人口流出が止まり、若者が戻って来るようになった。働き手が増え、区内に活気とゆとりが生まれたことで、農家で宿泊体験をする民泊や、生活研究会による地元食材を使った商品開発及び伝統料理の継承等が行われるようになった。

昭和54年には、村内の農業総生産額は約15億円で、農家1戸当たり農業生産額は約160万円であったが、平成29年には、農業総生産額は約43億円、農家1戸当たり約1,200万円と伸びてきている。

特に、かんがい農業の主力である花き農家は、農家収入が約1,700万円と高額である。

イ 西江上区のむらづくりにおける経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等について

① 経営の改善

西江上区の若手農家を中心となり、平成30年度から、村内農家の交流を深めながら、日頃の活動での課題や技術等を共有し、経営の向上を図ることを目的として伊江村青年農業交流会を開催している。現在、交流会には村内の20代から40代の農家、約50人が参加している。本交流会の開催は、農家同士で課題や経営を互いに意識することで切磋琢磨することを促し、今後の農業の発展に向けた担い手育成に寄与している。

② 女性の経営参画の促進状況

村内の担い手農家の経営参画促進を目的として、農業簿記経営講座が、6月から翌年3月の間に年10回開催され、女性13名を含む総勢約40名が参加した。どんぶり勘定になりがちな農業において、パソコンを活用して数字で経営を把握することにより、所得向上、経営改善につなげることを目標としている。本講座には、西江上区から女性5名を含む農家13名が参加しており、女性の経営参画促進に寄与している。

③ 後継者の育成・確保

畜産農家は、村内に148戸あり、その内、20代から40代の若手畜産農家で構成される伊江畜産青年部会「島牛会」は17戸で、最年少は25歳、会長は39歳である。

また、きく農家で構成される沖縄県花卉園芸農業協同組合伊江支部の支部長は37歳であり、若手きく農家15戸のうち最年少は28歳、構成員平均年齢は55歳となっている。

西江上区内では、農業後継者の育成・確保が進んでおり、花き栽培に従事するUターン新規就農者2戸、葉たばこの後継者7戸、若手和牛生産者5戸、その他の若手担い手農家1戸となっており、島内農業の中心的役割を担っている。また、これらの農業者は、IoT等の新技

術を導入するなど、栽培技術や畜養技術の向上意欲が旺盛で、地域農業のけん引役となっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 西江上区における生活・環境整備面の取組

農漁村の婦人たちの知恵を集結して地域の生活改善を行うことを目的として、昭和33年に伊江村生活研究会が発足した。本研究会では、島の伝統食文化の継承や、地域資源活用による特産品の開発、食育等、時代に応じた課題に取り組んでおり、現在は西江上区に拠点をおき、10名で活動を行っている。

昭和60年に、それまでの活動をまとめた「ふるさとの味」を発刊し、平成20年度に村民の要望で50周年記念誌として再発刊している。この本には、伝統食・行事食に加え、島野菜を活用した新しい料理のレシピが掲載されている。

また、島の食材を活かした加工品の開発・販売にも積極的に取り組んでいる。手作りの加工品は観光客に非常に人気があり、売上げも年々増加している。

その他、郷土料理学習会の開催、視察研修や勉強会への参加を行うなど、活動意欲が非常に高い。

(2) 西江上区におけるコミュニティ活動の強化、都市住民との交流等の取組

伊江村では、民泊事業が積極的に行われており、伊江島観光協会と株式会社こころの2団体が民泊事業を行っている。

伊江島観光協会は平成15年から民泊事業を立ち上げ、初年度は年間民泊受入れ人数317人、学校数3校だったが現在では、株式会社こころとあわせて約43千人、300校超に増加している。

当初はモデル的に西江上区の農家11戸で受け入れ、手探りの状態で民泊事業をスタートさせた。当時受け入れた学校では、伊江村での民泊を体験後、先生と生徒の関係が良好になり、学校環境も改善されたなどの効果があったことから、その後、12年連続して伊江村で民泊体験を行っている。

(株)こころは、平成26年に設立され、修学旅行等の民泊受け入れを行っている。

第4図 伊江村における民泊の取組
(受入)の推移

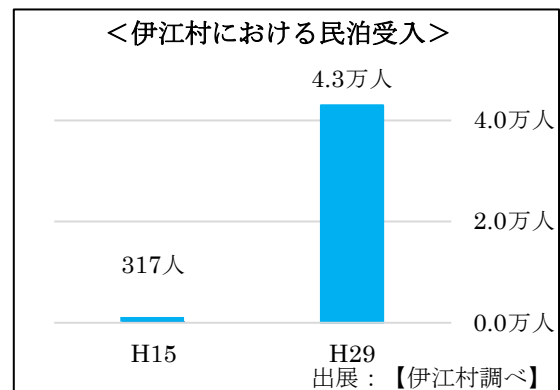


写真4 民泊の見送り

現在、伊江島観光協会民泊部会の会員は73名（西江上区14名）、（株）こころの会員は89名（西江上区10名）おり、地域全体に及ぼす経済効果も高い。修学旅行後も民泊で受け入れた家族との交流やリピーターとして家族で島を訪れる子供も多く、都市との交流につながっている。

また、民泊体験の一環として、島を訪れた生徒たちと民泊会員が共同で海岸や史跡の清掃活動にも取り組んでいる。

（3）西江上区における定住促進等の取組

西江上区では、定住促進による地域活性化を目的として、平成27年度に区営住宅4棟8世帯を建設した。

民泊のリピーターとして、成人してから伊江島を訪れる人も多く、実際に民泊をした縁で村内に就職し、島に定住した人もいる。

子供会では、中学を卒業すると島を離れるため（15歳の旅立ち）、3年に1度富士登山を行っている。この取組は、富士登山を通して助け合い、地域愛を育み、今後の高校生活などに生かすことを目的に行っている。この取組により、地域愛・地元愛が強くなり、担い手農家の後継者などUターン者が増加するなど、定住促進につながっている。

第5図 沖縄県内における全ての離島の人口の合計と西江上区の人口の比較

